

山王神社とその歴史

会長 原田 博二

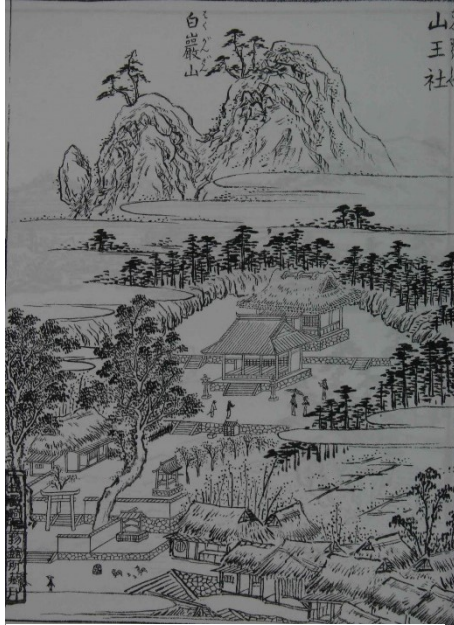
1、山王神社の沿革

山王神社は、寛永15年(1638)島原での一揆を平定した老中松平伊豆守信綱(以下、「伊豆守」と記述)の坂本の地に山王権現を勧請したらという意に従って勧請されたもので、慶安元年(1648)には真言宗の円福寺も開創された。

以後、円福寺は、浦上村(山里掛)内における祈禱寺として維持されたが、明治元年(1868)廃寺となり、山王神社(日吉神社・村社)と改称された。

一方、明治元年2月着任した長崎裁判所総督・長崎府総督澤宣嘉は、浦上四番崩れに鑑み、同年閏4月、現在の橋口町に浦上皇太神宮を勧請した。

浦上皇太神宮は、明治6年(1873)県社に列せられるなど、当初は長崎府、さらには長崎県の保護のもとにあったが、後に維持が困難になり、同16年(1883)山王神社に合祀され、現在に到っている。



「山王社」(『長崎名勝図絵』所収)

2、山王神社の勧請

山王神社の勧請について『長崎市史』の「円福寺」の項に「寛永拾五年松平伊豆守信綱が島原の賊徒追討の帰途浦上村字坂本の地を通過の際、長崎代官末次平蔵茂房を顧みて、この地の勝景叡山の下に酷似し、地も亦坂本と称して偶々名を齊うして居るは頗る奇である、ここに山王権現を勧請しては如何と云ったので、(略)」とあり(1)、伊豆守が長崎代官末次平蔵茂房に、坂本の地は近江の坂本(滋賀県大津市)に景観が良く似ている、地名も不思議なことに坂本である。よって山王権現を勧請するがよかろうと言ったので、山王権現を勧請(勧請の年月不詳)、慶安元年に円福寺が開創されたという。

ちなみにこの伊豆守の山王権現勧請については、元禄8年(1695)の北島雪山『山王権現宮縁起』(以下、『縁起』)と享保元年(1716)の「円福寺梵鐘銘」(以下、「梵鐘銘」と記述)も同様であるが、「この地の勝景叡山の下に酷似し、云々」は、この「円福寺」の項の執筆者の文章である。また『縁起』には「末次平蔵」、「梵鐘銘」には「末次平蔵茂房」とある(2)。

ところでこの『長崎市史』の記述には二つ不明な点がある。一つ目は、伊豆守に随行したという平蔵茂房であるが、その長崎代官在職は、正保3年(1646)から慶安2年(1649)まで、寛永15年(1638)に随行したのであれば、それは2代平蔵茂貞(1630~46在職)である。



山王神社の大楠

二つ目は、山王社の祭神である。というのは全国の山王神社の総本社日吉大社(大津市)は、江戸時代、山王権現と呼ばれ、天台宗の比叡山延暦寺の地主神として密接な関係にあった。

しかし、円福寺は、延命寺(真言宗・寺町)の開山龍宣によって開創された真言宗の寺院である。真言宗も高野山(和歌山県)の丹生・高野の両所は、山王と呼ばれたが、権現ではなく明神であった。

このように真言宗の円福寺が天台系の山王権現を祀ることなどあり得ないのであるが、『縁起』も「梵鐘銘」も「山王権現」とある。

最後にあくまでも伝説ではあるが、勧請にちなんでどうして伊豆守が登場するかというと、幕末から明治にかけて浦上は四番崩れの嵐が吹き荒れた。そのような旧幕府のキリシタン政策を踏襲した新政府にとって原城を攻め落とした伊豆守は、矢張り英雄であった。

このように真言宗の円福寺が天台系の山王権現を祀ることなどあり得ないのであるが、『縁起』も「梵鐘銘」も「山王権現」とある。最後にあくまでも伝説ではあるが、勧請にちなんでどうして伊豆守が登場するかというと、幕末から明治にかけて浦上は四番崩れの嵐が吹き荒れた。そのような旧幕府のキリシタン政策を踏襲した新政府にとって原城を攻め落とした伊豆守は、矢張り英雄であった。

このようなことからキリシタン政策の一端を担った山王神社は、明治元年の再出発にあたってその由緒に伊豆守を登場させたと考えるのである。

3、結語

以上、論述したように江戸時代の円福寺、さらには山王社については不明な部分が多い。特に真言宗の円福寺が天台系の山王権現を祀ったことについてはさらに究明する必要があるように思われる。今後の課題としたい。

本稿は、6月例会で発表した「坂本町とその歴史」の発表要旨である。

引用文献

- (1) 『長崎市史・地誌編・佛寺部下』長崎市 1923年 857頁
- (2) 註(1)に同 858~863頁